

令和八年一月度
御報恩御講

しょうじいちだい じ けちみやくしょう
『生死一大事血脈抄』 文永九年二月十一日 五十一歳

あいかま あいかま ごうじょう だいしんりき いた
相構へ相構へて強盛の大信力を致して、

りんじゅうしょうねん きねん たま
南無妙法蓮華経 臨終正念 と祈念し給へ。

しょうじいちだい じ けちみやくこれ ほか まった もと
生死一大事の血脈此より外に全く求むる

ぼんのうそく ぼ だい しょうじそく ね はん これ
ことなかれ。煩惱即菩提・生死即涅槃とは是

しんじん けちみやく ほけきょう たも
なり。信心の血脈なくんば法華経を持つと

む やく
も無益なり。 (御書五一五〇一行目～三行目)

■ 強調 ・ 確認 ■

『妙法尼御前御返事』には、

「先づ臨終の事を習ふて後に
他事を習ふべし」

と仰せのように、まず自分が
どのような臨終を迎えたいの
かを考えていけば、

今何をしていかなければいけないのか分かってくるということなのです。

先ほど多念の臨終とありましたが、日頃からお題目を唱え、信心修行に精進していく積み重ねがなければ、いざという時には何もできないものです。

「塵も積もれば山となる」
と言われますように、信心以
外の世間のことでも地道に毎
日コツコツと積み重ねていか
なければ大きな結果は出てこ
ないのと同じことです。

『日女御前御返事』には、

「南無妙法蓮華經とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切なり。信心の厚薄によるべきなり」

と「信心の厚薄」信心が厚いか薄いかによると仰せです。

自分で判断する都合の良い
薄い信心では無く、大聖人様
の仰せを、御法主上人の御指
南を拝し奉り、その仰せの通
りに厚い信心をしていかなけ
ればいけないのです。

御法主曰如上人猥下は、

「我ら末法本未有善の衆生は、
弛まぬ信心、不退の信心、御
本尊への絶対的な無疑曰信の
強盛な信心があつてこそ、成
仏がかなうことを忘れてはな
りません」と御指南をされて
います。

自分勝手な考えの信心では無く、戒壇の大御本尊様を絶対的な信心、すなわち純粹に心から拝して、血脈付法の時
の御法主上人の御指南のもとに異体同心し、団結して信心修行・折伏をしていくところに私たちにも信心の血脈が流れ通うということです。

本年は「団結行動の年」と銘打たれております。昨年よりも一歩でも二歩でも積極的に信心修行、そして折伏をしていくことができるように、そのためには何をしていけば良いのかを共に考え、講中が一丸となって精進して参りましょう。